

モード・ダイヴァーの『ライラマニ』について

—反フェミニズムと帝国主義—

小西真弓

序

イギリスにおいて帝国主義が最高潮に達した1890年から1930年代にかけて、インドを舞台にしたロマンス小説が女性作家によって数多く執筆された。¹⁾ これらの小説は、出版当時には多数の読者を獲得したものの、英文学の研究の対象にされることはほとんどなかった。しかし近年、帝国史を女性の観点から見直す研究が盛んになったためか、とりわけインド体験をもつ女性作家による作品が再読されるようになった。彼女たちのロマンス小説には、インドを単なるイギリス人の恋愛物語のエキゾチックな背景にしているだけのものも目立つが、中にはタブー視されていた、異人種間の恋愛や結婚をあえてテーマにしている物語もある。サーラ・スレイリが指摘するように、それらの作品はインドのイギリス女性が、「インドの諸文化と様々な社会をピクチャレスク（絵物語）の主題と見なし、…イギリスとインドのダイナミックな文化衝突を静止画の中に封じ込める」²⁾ ような役割を担っていたことを感じさせる。とはいえ、イギリス人とインド人の恋愛を扱った物語には「東は東、西は西」というキップリングの声が連想され、彼らの恋は実らずに悲劇的な結末を迎えるものが少なくない。それは両者の結びつきによる混血児の出生が歓迎されなかったためであり、イギリス女性作家たちの心には、異人種間のロマンスに憧れる気持ちはあっても、人種の純潔を重んじる帝国主義思想がより深く浸透していたことを暗示している。そのような心性は、「キップリング派」に分類されるモード・ダイヴァー（1867～1945）の数々のアングロ・インド物語にも反映されているが、³⁾ 本稿ではイギリス男性とインド女性が夫婦愛をまっとうする彼女の異色の物語『ライラマニ』（1911年）を紹介し、そのテーマを探求してみたい。

I

『ライラマニ』に登場するイギリスの男爵家の長男で画家を目指すネヴィル・シンクレアが、17歳のインドの少女ライラマニと出会うのは、フランス南部のアンティーブ（Antibes）である。政治家の道を促す家族が疎ましかった彼は、絵の修業と称して実家のブラムレイ・ビーチズ（Bramleigh Beeches）を逃げ出し、画家や小説家の友人と共に当地でボヘミアンの

*テキストにはMaud Diver, *Lilamani: A Study in Possibilities*, ed. Ralph Crane (Oxford: Oxford UP, 2004) を使用した。本文中の括弧内の頁数はすべてこの版によっている。

1) この点に関しては、Margaret F. Stieg, "Indian Romances: Tracts for the Times," *Journal of Popular Culture* 18.4 (1985) 2-15参照。

2) Sara Suleiri, *The Rhetoric of English India* (Chicago: University of Chicago, 1992) 75.

3) Bhupal Singh, *A Survey of Anglo-Indian Fiction* (London: Curzon Press, 1974) 111-17参照。

な生活を楽しんでいた。彼の人生には「核心にふれる」べき対象がなかった。芸術さえ「もて遊ぶ」だけのものだった。しかしある日、ホテルで見かけた神秘的で美しいライラマニからインスピレーションを受けた彼は、にわかに芸術家魂に目覚める。東洋の絶世の美女とも呼べそうな彼女は、正に「最良の絵」になる存在に感じられた。こっそりとスケッチを描いたものの、それを本格的な絵にするためには本人にモデルになってくれるように頼まなければならない。しかし、ヒンドゥー教徒の彼女に直に声をかけることは憚られた。そんな折、偶然再会した幼友達でインドの医療活動に携わっている女医オードレイ・ハモンドから、ライラマニが高カーストのラージプートの娘で、母親とグル（家庭司祭 guru）が強制する結婚を避けるためにヨーロッパへ逃げ出し、彼女のもとで医学を勉強中の身の上であることを知る。

「新しい女」として活躍中のオードレイの夢は、ライラマニのような少女が西洋の医学教育によって自立の道を歩み、医療活動を通してインド女性の社会的地位の向上に貢献することであった。ライラマニが同胞の女性に手本を示せば、インドにおけるフェミニズム運動も促進されるはずであった。ネヴィルの意図を知る由もなかったオードレイは、ライラマニの社交教育のために、彼女をネヴィルに紹介する。やがて父親のラクシュマンとも知り合いになったネヴィルは、ライラマニを描いたスケッチを見せて彼女を本格的な肖像画のモデルにする許可を求める。

ヒンドゥー教徒として娘を若い男性の絵のモデルにすることには抵抗を感じたが、ラクシュマンはケンブリッジで学んだイギリス人びいきで、絵画に興味もあった。そのためにネヴィルの申し出をむげに断わることも憚られた。結局、返事は彼女の気持ち次第ということになる。ライラマニは肖像画のモデルになることに「自然な嫌悪感」を覚えたが、父親の面目をつぶすことを懸念して、ネヴィルのキャンパスの前に身を置く決心をする。そのうち二人の間には恋愛感情が芽生え、彼女は医学の勉強よりもネヴィルとの恋に夢中になる。ライラマニには医学に関する「無味乾燥な事実」だけを教えるオードレイの講義よりも、詩的な想像力に訴えるネヴィルの話から学ぶものの方が多きような気がした。そんな彼女は「衛生学、酸素、構造生理学」という言葉の響きさえ厭わしくなってきた医学の講義を上の方で聞き流すようになり、オードレイを激怒させる。

ライラマニを勉学に引き戻すために、オードレイは意に染まぬカーストの結婚を承諾するよう彼女を脅したり、二人の恋愛に水を差そうと彼女が故郷を逃げ出した事情をネヴィルに打ち明ける。しかしそれは逆効果で、ライラマニの身の上を知った彼は、騎士道精神に目覚め、彼女を天から授けられた自分が救うべき存在だと思ふようになる。そもそも詩情豊かなライラマニは、生理学や衛生学に向くようなタイプではなく、オードレイの計画は「月に届こうとする」夢に過ぎないのではないか。ライラマニのような女性は医者になって自立の道を歩むよりも、しかるべき男性の伴侶になるほうが幸せになるはずである。芸術家肌のネヴィルにとって、彼女との宗教や人種の差異は乗り越えられない障壁には感じられなかった。結婚生活には男女の愛こそがなくてはならないものであり、世間体は二次の問題であった。異国の地であって彼はイギリスの家族の思惑も憚らず、オードレイの反対を押し切ってライラマニにプロポーズする。

ライラマニにとって、異教徒のネヴィルとの結婚は世俗的には不可能とは言えない。しかし、それはカーストの掟を破ることであり、家族との絶縁を意味した。母親の意に逆らって海外へ逃亡したうえにキリスト教徒と結婚するとなれば、実家には永遠に戻れないかもしれない。しかし医学で身をたてる自信もなければ、ヒンドゥー女性の適齢期を過ぎて高カーストの男性との良縁は望むべくもない。そのために彼女は思い切ってネヴィルに人生を託す気持ちになる。そんな娘の心情を汲んだラクシュマンは、異人種間の結婚につきものの困難や批判を予測しつつ、二人の結婚を認めるざるを得なかった。

II

19世紀末のイギリスにおいて、異人種間の結婚が眉をひそめられたことを想起すれば、ネヴィルとライラマニの結婚話にオードレイが反対するのも、二人の行く末を案じてのことと言える。また二人の選択を「新しい女」の生き方を否定するものと受け止めたなら、彼女が憤るのも無理からぬことであろう。それはさておき実際に物語の設定された1890年代においては、イギリス・インド双方で女性にも医学の道が開かれ、彼女のような独身で活躍した女医も珍しくはなかった。男女隔離の風習があるアジアやアフリカの植民地において、オードレイのような「新しい女」も、原住民女性の診療や衛生教育に必要な存在と見なされた。本国では男性の領域だった医学の世界で女医が活躍することは難しかったが、植民地には彼女たちにふさわしい仕事や地位があった。ダファリン伯爵夫人（ダファリン総督の妻）が開始した募金活動も、イギリス政府の支援を受けるようになり、その基金はインド女性のための病院建設ばかりではなく、彼女たちの医学教育にも使われるようになった。⁴⁾ 無論カーストの掟ゆえにインド女性に医学教育を施すのも、彼女たちを西洋風に治療するのも困難で、反対の声も大きかった。しかし、それらは女性の地位を文明化の尺度としていた帝国主義に反するものではない。しからば、「因習に縛られて自助の不可能なインド女性を救う」というオードレイの使命感や医療活動も、それなりに評価されるべきものであったに違いない。

男性と肩を並べて働くようになったイギリス女性が、オードレイのようにフェミニズムに目覚めるのは、当然の成り行きのように思われる。しかし、女性の社会進出は、保守的な男性のみならず、社会的に名声を博した職業婦人にさえ、「家庭の天使」あるいは「アングロ・サクソン人種を生き育てる」という帝国主義がイギリス女性に課した役割を放棄する現象にも思われた。そのためか、婦人参政権を要求するフェミニズムに反対した人物の中には、カーゾン卿をはじめとする帝国支配者ばかりではなく、⁵⁾ アラベラ・ケネーリーのような女医や女性作家たちもいた。⁶⁾ 彼らは女性の本来の居場所は家庭であり、政治に女性が首を突っ込む必要はないと考えた。中には女性が男性と伍して高等教育を受けたり知的な仕事に携

4) このような募金活動については、Kristine Swenson, *Medical Women and Victorian Fiction* (Columbia: University of Missouri Press, 2005) 164-65; Geraldine Forbes, "Medical Careers and Health Care for Indian Women: Patterns of Control," *Women's History Review*, vol.3, no.4, (1994) 518-27 参照。

5) Alison Sainsbury, "Married to the Empire: The Anglo-Indian Domestic Novel," *Writing in India 1757-1990: The Literature of British India*, ed. Bart Moore-Gilbert (Manchester: Manchester UP, 1996) 167-68 参照。

6) 彼女たちの帝国主義的反フェミニズム観については、*Anti-Feminism in Edwardian Literature*, ed. Lucy Delap & Ann Heilmann (London: Thoemmes Continuum, 1997) vol. V; Archibald Colquhoun, *The Vocation of Woman* (London: Memillan, 1913) 参照。

わって頭を使うと、優秀な子孫を受胎する能力が損なわれるという説まで唱えた反フェミニストも存在した。帝国主義を支持する人々にとって、支配者階級たるイギリス人の減少を予測するのは恐ろしいことであった。そのために、男女の機会均等や婦人参政権に同意するフェミニストの間にも、母性保護のために女性は結婚と同時に職業から退くべきだという考え方は根強かった。

母性優先という観点にたてば、ライラマニが医学の道を放棄して結婚を選択するのも一人の女性の生き方としては適切であろう。次のようにネヴィルとライラマニの恋愛に嫉妬するオードレイの描写は、「新しい女」の限界を感じさせるものであり、作者が急進的なフェミニストたちに批判的であったという印象は否めない：

...オードレイでさえ恋に陥ったのだ。自然が彼女の体から心を引っ張り出し、それを一人の男に与えたのだ。その男、ネヴィルは足元の小石ほどにも必要のない男で、意志や目的達成の力においては、彼女に全く及ばない人物だったが...

そう思うと全身が炎に包まれるように、彼女は怒りに燃えた。何の権利があってネヴィルがオードレイをその気もないのに所有するのか。それは彼女のプライド、普通の女性の人生において男性が重きを成してきたすべてのものに反感を抱くひねくれた精神に対する挑戦だった...

恋愛感情が湧き上がったとなると、オードレイがライラマニに嫉妬したのは真実であった。なぜならネヴィルの眼差しと心は、彼の筆によって絵が完成に近づくにつれ、ますます嬉しそうにライラマニに向けられたためであった。(60-61)

オードレイがネヴィルの恋愛感情を掻き立てないのは、彼女に女性としての「魅力」や「雰囲気」が欠けているからである。「自己完結的」で「輪郭のはっきりした」彼女は、ネヴィルの「友人」ではあっても、彼の情熱や騎士道精神を喚起することはできなかった。彼女は男性とダンスをしても「胸が躍ることはない」セクシュアリティに欠ける女性であり、「ヴィクトリア朝中期の理想に反動的で、アングロ・サクソン人種のためにも、個人的にも利益をもたらす自然な感情を犠牲にして頭脳や自我を発達させた産物」(36)であるかのように描かれている。なるほど彼女には知性や使命感はあるが、医学を学んで科学万能主義に陥り、情操や他人を思いやる想像力がいささか欠けている。そのためか、ライラマニに対する態度も自己満足的で、息苦しさを感じさせるものがあつた。

「女らしさ」に欠けるオードレイの性格付けは、医学教育が女性を中性化するという反フェミニズムの声に影響されたものであろうか。キップリングでさえ、インドで活躍した後に結婚相手に恵まれる魅力的な女医を描いていることを考慮すると、⁷⁾ 作者の女性観は極めて保守的なものと言わざるを得ない。しかし、「新しい女」の生きかたに批判的なダイヴァーも、フェミニズムの背景にある「余った女」の問題は認識していたのであろう。それは「イギリスの父親に、娘に結婚相手を与えるヒンドゥー教徒のような義務があつたら、女性問題

7) キップリングとW. バレステール (Wolcott Balestier) との合作『ナウラーカ』(Naulahka, 1892) に登場するアメリカ娘ケイトは、インドで女医として活躍した後に主人公と結婚する。

はこれほど深刻にはならなかっただろう」(139) というオードレイの告白からも窺い知れる。しかし、たとえイギリスにそのような結婚の習慣があったとしても、帝国主義の進展によって若いイギリス男性が海外へ流出した時世にあって、中産階級の女性は本国の結婚市場ではあぶれがちであったに違いない。実際に当時は「帝国の母」になるために、わざわざ植民地へ渡って結婚相手を探した女性も多かった。それもかなわず、家族に養われるあてもなかった「余った女」たちに選択できた自立の道は、いわゆるガヴァネス（住み込みの家庭教師）になることぐらいであった。とすれば、彼女たちが女性の社会的な権利の拡大を求めたのも当然であろう。オードレイのような女性は、いわば時代の落とし子であり、その生き方は帝国主義を支持する限り、反フェミニストにも必要悪のように感じられたはずである。ちなみに、作者自身がインドで結婚相手に恵まれたことを連想すれば、⁸⁾ その胸中には多少なりとも「余った女」たちの境遇に同情する気持ちもあったように思われる。

III

オードレイに比べると若くて美しいライラマニがネヴィルの男心をくすぐるのも自然の摂理であろう。下記のように描かれるライラマニは、17歳の少女にしては官能的で、作者自身がオリエンタリスト画家が好んで描いた東洋女性の「女らしさ」に魅惑されていたように思われる：

彼女のオリーブ色の肌はかすかに輝いていた。物思いにふけるように海と空を見つめている艶やかな黒い目は、少女らしい誠実で優しい顔を隠すことなく半分だけヴェールで覆われ、金色に縁取りがされ、月見草のように青白いサリーによって浮き彫りにされていた。このような美貌と下のペランダでお茶を飲んで歓談している人々から距離を置いている姿が、彼女の浮世離れした魅惑的な雰囲気醸し出していた...

シンクレアには彼女の額や頬、鼻筋の絶妙な輪郭、バルコニーの手すりにもたれていた細い均整のとれた手、東洋に典型的な身のこなしや、ヴェールに覆われた頭の輪郭を賛美する余裕があった。目の重々しさにもかかわらず、熟れた下唇が象徴する情熱とそれに似つかわしい丸いあごに投影されている意志の強さは、いつか彼女を成熟した女性にする光と影の様々な要素を感じさせた。今のところ、彼女はそれらの要素の一部だけを覗かせている存在である。太陽の強烈な口付けを待っている半分だけ開いたつぼみように。(5-6)

ネヴィルが描いたライラマニの絵は、美しいサリーを纏った彼女の写実的な姿であり、19世紀のオリエンタリスト画家たちが描いたオダリスクの系譜に属するものではない。それを

8) モード・ダイヴァーの伝記についてはあまり資料がないが、*The Oxford Guide to British Women Writers*, ed. Joanne Shattock (Oxford: Oxford UP, 1993) 134; 及びテキストの編者による注を参考にした。これらの資料によれば、彼女は1867年インドのパンジャブ北部で生まれたとのことである。父親は軍人兼行政官だったC.H.T. Marshall 大佐で、有名なヘンリー・ロレンスの妻オノリア・ロレンス (Honoraria Lawrence) は彼女の大叔母にあたる。イギリスで教育を受けるためにモードは帰国したが、1863年にインドへ戻り、後にイギリス軍の中佐となった軍人トーマス・ダイヴァーと1890年に結婚した。永久帰国したのは1896年で、彼女がインドに滞在した期間は20年前後と推定される。

鑑賞した彼の友人たちが、エロチックな願望を掻き立てられたというような叙述もない。しかし、「太陽の強烈な口付けを待っている半分だけ開いたつぼみ」という比喩が暗示するように、生身の彼女にはインド女性に特有とされる官能性が投影されている。それはライラマニが、シンクレア家の男性たちや友人をことごとく魅惑するエピソードからも感じられる。貞操観念が発達しているにもかかわらず、彼女が「魅惑する少女」あるいは「後宮の少女」と陰で呼ばれるのも、いかにイギリス女性の目に、美しいインド女性が夫や愛人を奪う脅威的な存在に映ったかを仄めかしているように思われる。

このようなことに注目すれば、アングロ・インド小説の中でインド女性がイギリスの恋人に捨てられたり、戦争に巻き込まれて他界する筋立ては、人種隔離を掟とする帝国主義のエートスを反映すると同時に、イギリス女性の心情を汲んだものとも言えよう。もっとも、抹殺されたインド女性に代わってイギリス女性がその恋人の正妻の座に納まるような物語の顛末には、後味の悪さを感じた読者もあったであろう。それはともかく、そのような小説に慣れ親しんでいた読者にとって、ライラマニがプラムレイ・ビーチズの女主人に納まるという筋立ては意表を突かれるものであったに違いない。「キップリング派」のダイヴァーなら、職業を放棄させたオードレイをネヴィルの妻に据えることも期待されたであろう。この点に関して、次のようなヘイガー・ベン・ドリスの反フェミニズム的な批評は、物語のテーマを理解する上で参考になる：

ライラマニを新しい女にしそこなったオードレイの失敗は、ダイヴァーがフェミニズムの不毛な使命を証明するための役割を果たしているだけではない。オードレイをさらに罰するために作者は、彼女が自分のロマンス小説の主人公ネヴィル・シンクレアを恋するように仕向ける...ネヴィルのオードレイへの友情は、彼女がライラマニとの結婚を妨害してから、敵意や嫌悪の気持ちに変わった。オードレイはネヴィルとライラマニの結婚後まもなく物語から消される。それはフェミニズムに対するフェミニニティ（女性性 *Femiminity*）の勝利を表している。

ダイヴァーは東洋女性を女らしさの理想として選択した。東洋は自立や平等というフェミニストの言説で損なわれてはいなかった。ラジャンによれば、「ヒンドゥーの良妻は、家父長制の下での女らしさの理想として作り上げられている。同時に彼女たちは、文化的には全くの他者の象徴や典型として描き出されている」⁹⁾という。そのために、東洋の女性は見習うべき手本のように感じられる。このような言説は、『ライラマニ』の勝ち誇ったような語り手の口調が表明している。語り手はダイヴァーの確信的な反フェミニズムに便乗するかのようには物語に介入している：「自然は正に人生の空しさを嫌うように、男女平等を心から嫌悪する。自然は、その偉大な目的に女は沿うべきだと見なすように、男を作り上げた。オードレイには分かりきったことであろうが、その事實は西洋より東洋にいたほうが、素直に認められる。」¹⁰⁾

9) Rajeswari Sunders Rajan, *Real and Imagined Women: Gender, Culture and Postcolonialism* (London: Routledge, 1993) 47-48.

10) Hager Ben Driss, "Women Writing / Women Written: The Case of Oriental Women in English Colonial Fiction," *Middle East Studies Association Bulletin* (Winter 2001) 3.

ダイヴァーがヒンドゥー女性の女性性を評価していることは、ライラマニの献身によってネヴィルが東洋画家や家長として成長する物語の展開から導き出せる。夫を「神」のように慕い、家族の世話に全身全霊を捧げるような生き方は、オードレイが認めるようにイギリスの「新しい女性」には不可能だったが、ライラマニにとっては当然の義務であった。彼女は聖書の勉強をしたりクリスマスを祝うようにはなるが、改宗を強制されることもなく、相変わらず貞淑や献身を象徴するシーターやサーヴィトリーの生き方を手本にして結婚生活を送る。夫の食事作りを使用人に任せず自分でこなしたのも、ヒンドゥー妻の夫に対する義務感からであった。ライラマニの内助の功に支えられたネヴィルは、独身時代の勝手気ままな生活を改め、ブラムレイ・ビーチズの管理・経営に真剣に取り組むようになる。彼が東洋画家として名声を高める気持ちになったのも、生活のためではあるが、ライラマニに導かれたからでもあった。『ラーマヤナ』を題材にした6枚の絵は、彼女がシーターのモデルとなって物語を解説しなければ、傑作にはならなかった。彼の絵の進歩に驚いた画家仲間のマティノーが言うように、ライラマニこそ、ネヴィルの芸術家魂を燃え上がらせた「炎」だった。現世での出来事とはいえ、周囲を驚かせた彼の変貌は、「精神的には夫よりも優れたヒンドゥーの妻は、夫が来世においてより良く生まれ変わる力を掌握している。夫は妻なくしては生まれ変わることはできない」(116)というラクシュマンの説を具現しているように感じられる。

IV

東洋的なライラマニの女性性の発揮はドリスの述べるように、フェミニズムに対するアンチテーゼとして対比されていると言える。ダイヴァーが「新しい女」たちの中性化を懸念していたとすれば、夫の来世を保証するために男子を産み育てることが妻の義務であるというヒンドゥー的な考え方にも共感を覚えたのであろう。ライラマニが不妊のストレスによって寝込む様子や、子宝に恵まれて心の安らぎを得た姿には、母性を尊重する作者自身の女性観が反映されているように思われる。¹¹⁾しかしライラマニの言動や役割をさらに分析してみると、彼女が東洋の女性性の美德を体現する役割のみを担った存在ではないことが理解させる。

ライラマニが気の進まない結婚から逃げ出しヨーロッパへ雄飛するためには、父親やオードレイの協力が必要であったが、それは彼女の意志に基づいた行動であった。また彼女は医学を放棄し、ネヴィルと結婚することを主体的に選択した。このような彼女の主体的な行為が、従順で自己否定的なヒンドゥー女性のイメージにそぐわぬフェミニズムを連想させることは否定できない。彼女がネヴィルに尽くしたのも、彼が芸術家魂に燃え人種的な偏見を乗り越えようとする尊敬できる男性であったからであり、どのような夫でも神として、その命令には従うべきだという信仰は、ライラマニには受け入れ難かった。

さらに経済的な側面に注目すれば、ブラムレイ・ビーチズの家計はネヴィルや顧問弁護士に管理されているが、ライラマニに全く発言権がなかったわけではない。ことに持参金の運用

11) 物語の続編、『遠くを探し求めて』(Far to Seek, 1921)の第1章には、ライラマニが三男一女に恵まれた様子が描かれている。Maud Diver, *Far to Seek: A Romance of England and India* (Boston: Houghton Mifflin, 1921) 1-2 参照。

について、彼女はその一部をシンクレア家の困窮した親族の援助に使う権利を認められている。それほど余裕のある持参金を用意できた父親の援助は結婚後も期待され、ライラマニはネヴィルに東洋画の製作に専念させることができた。ちなみにロンドンでの展覧会に必要であった画材やインテリア用品を提供するのもラクシュマンである。先代の投機の失敗で三分の一も抵当に入っていたブラムレイ・ビーチズが持ち直すのは、ネヴィルの絵が売れるようになったおかげで、ライラマニの提案がなければ男爵家は破産に追い込まれかねなかった。このような夫婦の経済的な関係は、ネヴィルが長男ロイのインド旅行に大反対する義姉ジェーン・ラスコーを説き伏せる際の、「姉さんが愚かだと罵ったライラマニとの結婚によって、シンクレア一族の名声は高まり、先祖代々の家屋敷を抵当に入れた金も全額返せたんだぞ」¹²⁾という言葉に要約されている。つまるところ、ライラマニは、ブラムレイ・ビーチズの共同経営者であり、家父長制の下に隷従を強いられる存在ではなかった。そのために二人の結婚生活においては必ずしも夫唱婦隨の原則は守られず、夫婦の従属関係にさえ曖昧さが感じられる。

夫婦としてネヴィルとライラマニの相性が良かったのは、異なる性格をもつ二人がお互いを補完し合ったからであろう。本質的にやさしく天真爛漫な性格をもつネヴィルが強い信念をもつ献身的な妻の意見に折れるのも不思議ではない。しかし問題となるのは、ライラマニの内面に潜む敵愾心が義姉との折り合いを悪くさせ、ネヴィルを悩ませたことである。確かに彼女が自分を「インドの土人」と蔑みブラムレイ・ビーチズに迎えることを拒否した義姉を宿敵と見なすのは当然である。とはいえ、その気持ちを押し殺すこともなく、かなり年上の義姉に半永久的に反骨精神を示し続けることは、理想的なヒンドゥー妻の女性性とは齟齬をきたすものである。もっともそれは、ラージプートの彼女の民族性の問題であり、その先祖伝来の戦闘精神は、ネヴィルとの結婚に大反対するラスコー夫人の手紙を血眼で探す彼女の様子に、次のように投影されている：

...彼女の反逆の精神は—幸福感や妻らしく献身する気持ちに覆いかぶさったが—再び勢いよく頭をもたげた。彼女の民族的な戦闘精神は、女たちにさえ自尊心や名誉を自己否定の義務よりも重んじるように命じた...その精神はベンガルの几長の内に籠る女たち以上に、帳の中のラージプートの女たちを支配するものであった。ネヴィルのためなら、彼の穢れのない名誉を保つためなら、彼女はありとあらゆることに挑戦することができたし、そのつもりだった。夫の彼にさえ刃向かうことも厭わなかった。(179)

ラージプートがアーリア民族の末裔でありヨーロッパ人と人種的に繋がりをもつという説は、物語の出版年以前にマックス・ミュラーによってその誤謬が認められていたが、¹³⁾ ラクシュマンにとっては娘の結婚を認める論拠であり、ネヴィルにも受け入れられている。この学説が他の登場人物のインド人観にさほど影響を与えないのは当時の現実を反映している

12) *Ibid.*, 113.

13) 寺田和夫『人種とは何か』(岩波書店, 1967) 156-59 参照。

が、それをあえて持ち出したのは、読者の異人種間の結婚に対する批判を少しでも緩和しようとしたダイヴァーの苦肉の策であろうか。もっとも好戦的民族を好むイギリスの読者にとっては、ラージプートがヒンドゥー教徒の中で最も勇敢であるという風評のほうが、ライラマニやラクシュマンに対する人種的な偏見を軽減したのではないだろうか。しかし、たとえイギリスの読者がライラマニの美しさやネヴィルへの献身に感激しても、その闘争心を女性性の表れと見なすことはできなかったに違いない。それは男性性を萎縮させるものであり、男女の心理的な差異さえ不明瞭にする危険性を孕んでいるように思われる。

このようなライラマニの全体像からは、作者の反フェミニズムとは、女性性を発揮した内助の功や母性の尊重するものであり、男女の役割分担は認めるにしても、女性の男性に対する盲目的な服従や依存を唱えるような言説ではないことが理解される。ダイヴァーが男性の帝国支配者のように、インドのゼナーナ（婦人の隔離部屋）を政治的陰謀の温床と見なしていたならば、イギリス女性も家庭で夫の心を動かして、政治にも間接的に参加できると考えられたのであろう。作者の東洋の「女性性」礼賛は、家庭こそが帝国の単位であり、夫婦の統一された意志こそが国政に反映されるべきだという帝国主義的思想には好都合であったが、イギリス女性が政治に直に参加する権利を認めることにはならなかった。

V

ライラマニがネヴィルとの結婚を「狂気の沙汰」と非難するラスコー夫人の手紙を発見して自殺を図るのは、戦闘精神を内に秘めるラージプートの女性らしからぬ行為に感じられる。しかしそれは彼女にとって、夫の名誉を守るためには自害も憚らぬという民族の矜持を示すためであり、来世における報いも期待できる立派な行為に思われた。彼女が自殺を思い止まるのは、「姉を事実上の殺人者」にすることなく、夫に先立たないようにというネヴィルの懇願を無視することができなかったからである。ネヴィルの愛を感じた彼女は二度と自殺を試みないことを誓うが、ラスコー夫人の「混血の後継者」を誇る手紙の内容は、その後の二人の結婚生活に影を落とす。ネヴィルがライラマニとの結婚に抱いた「東洋の精神性と西洋の活力の融合」という夢は芸術の世界では称賛されても、現実の社会生活においては抽象的な空論と見なされ、欧亜混血の誕生を歓迎する論拠にもなり得なかった。このことは何よりもネヴィル自身が「混血の烙印」に拘りを持ち、子供を持つことに関心を向けないという事情に物語られている。

ヒンドゥー教徒の価値観を十分に理解できないネヴィルが、子供を宿さぬライラマニの不安が想像できないのは無理からぬことであろう。彼にとって、子孫はなくとも絵を描きながらライラマニとブラムレイ・ビーチズを守りつつ暮らせれば、それだけで充実した人生であった。しかし、ヒンドゥー教徒の彼女には、息子の誕生こそが結婚の目的であり、子供がなければ夫婦生活の意味はないように思われた。ヒンドゥー教徒の夫なら誰でも男の子を欲しがると、妻の妊娠を期待しないネヴィルの心境は不可解であった。そのために彼女はネヴィルの無関心が「混血の烙印」に対する嫌悪ではないかと心配するようになるが、その真意を確かめるのも恐ろしく一人で思い悩む。なかなか子宝に恵まれないことも彼女の心に重く

のしかかるが、その悩みを父親やオードレイに打ち明けることはできなかった。心労が積み重なったうえに、初めてのイギリスの冬の寒さに曝され、彼女はついに病の床につく。彼女の憔悴した様子を見かねたラクシュマンは、ネヴィルに転地療養を求めるが、ライラマニには夫たる者が妻のために仕事や生活のペースを乱すのは、その面目を失うことのように思われた。父親が嫁いだ娘の生活について婚家先に口を出すのも、ヒンドゥー教徒にふさわしからぬ行為であった。二人の話し合いを立ち聞きした彼女は、病身で子どもの授からぬ自分の存在が、ネヴィルや父親の名誉を傷つけることを恐れて、再び入水自殺願望に駆り立てられる。そんなライラマニの気持ちを救ったのは、「混血の烙印」に対する不安を克服したネヴィルの父親になりたいという意思表示であり、その後まもなく彼女は病から回復して子宝に恵まれる。

このような物語の顛末について、偶然にもライラマニを尋ね、ネヴィルに彼女の自殺を阻止させるオードレイは、デウス・エクス・マキナ（Deus ex machina、機械仕掛けの神）の役を演じているように思われる。オードレイが、不妊のストレスによってライラマニの病いが長引き、彼女が自殺願望に追い立てられることをネヴィルに認識させなければ、二人の結婚生活は破綻したであろう。後に夫婦が子供に恵まれたことを考慮すれば、ライラマニの母性を守り、ブラムレイ・ビーチズに幸福をもたらしたオードレイはネヴィルに感謝こそされ、その友情を失うようなことはなかった。女医としてインド女性と接していた彼女に、ライラマニの激しやすい性格や価値観についてネヴィル以上に理解があったのは当然かもしれないが、彼女のライラマニへの対応には、保護者的な思いやりが感じられる。いかに女性性を放棄したフェミニストのように描かれていようと、作者には帝国の母のような役割を果たす彼女を「罰する」気持ちはなかったと思われる。結局、ダイヴァーにとって、オードレイに投影されている母性的帝国主義は、たとえそれがフェミニズムに繋がろうと、称賛に値したのであろう。それは帝国主義の理念の前に、反フェミニズムとフェミニズムが交錯したこと、すなわち女性問題に関して帝国主義の言説そのものに矛盾があったことを物語っているのではないだろうか。

おわりに

『ライラマニ』の幕切れが中途半端に感じられるのは、ネヴィルとライラマニの行く末が案じられるためであろうか。物語の続編、『遠くを探し求めて』の冒頭で、二人に三男一女が授かったことを知らされれば、現代の読者は安堵感を覚えるだろうが、帝国主義時代のイギリス読者には、男爵家における混血は「途方もない」と感じられたかもしれない。¹⁴⁾ あえてこのような物語が書かれた背景には、出版当時のイギリスとインドの関係が、カーゾン総督の推し進めたイギリスの利益を優先した経済政策や人種差別によって悪化しつつあったという問題があり、帝国の安泰を願う作者としては、『ライラマニ』の副題が表すように両者の和合の「可能性を研究する」目的があったのであろう。そのために、物語のイギリス側

14) テキストの注（Ⅶ-Ⅷ）参照。

の立役者には東洋を西洋に解説しようとするオリエンタリスト画家が選ばれ、その伴侶には西洋教育を受けた理想的なヒンドゥー女性が添えられたと思われる。19世紀末にオリエンタリズムがヨーロッパの美術界で流行していたことを想起すれば、インドのナショナリズムの声が届かぬ南フランスにおけるネヴィルとライラマニのロマンスには違和感もなく、「イギリスとインドのダイナミックな文化衝突を静止画の中に封じ込める」意図さえ感じられる。しかし二人の関係を実生活の場面において捉え直してみると、東西の相克は必然的であるような印象も受ける。そもそもネヴィルが解説しようとした東洋とは、ライラマニを通して知ったインドの神話的な世界であり、現実のインド社会や原住民は、彼にとっては絵になる存在ではない。ライラマニとエジプトを訪れた彼は、当地の実態に幻滅し、東西には文化的あるいは民族的に埋め尽くしがたい溝があることを悟る。ライラマニにしても、男爵家の女主人には納まったものの、その風習には馴染めず、ラスコー夫人の言動に窺い知れるような人種的偏見には苦しめられるばかりであった。たとえキリスト教徒に改宗しようとも、イギリス人にとって彼女はあくまでもインドの「他者」に過ぎない。

ライラマニにはイギリス社会の人種差別に対する批判精神が欠落しているが、ラスコー夫人と彼女の民族の名誉をかけたような対立は、インドにおいて反英感情が高まり、ナショナリズム運動が新たな展開を繰り広げていたことを連想させる。実際には20世紀初頭のベンガル地方で、ライラマニのような高カーストの女性もガンディーに導かれて、ベンガル分割に反対する政治運動に加わっていた。¹⁵⁾ イギリスのフェミニズムや西洋化教育の影響を受けたインド女性たちは、政治活動に目覚め、彼女たちを抑圧する植民地支配やヒンドゥー社会の悪弊に意義を唱え始めた。彼女たちにとって、ナショナリズムの進展のために自己犠牲的なヒンドゥー女性の理想像が持ち上げられることは、はなはだ迷惑だったのではないだろうか。結局、帝国主義の推進はイギリス女性ばかりではなく、インドの女性にも家父長制の下での母性や内助の功の体現者という役割を再認識させると同時に、社会的権利への願望を掻き立てたのである。『ライラマニ』の中で、フェミニズムと反フェミニズム、イギリスとインドの境界線が不明瞭に感じられるのは、インドに長らく滞在した作者にとって、そのような帝国主義が女性問題にもたらした両義的な状況が、自明の理であったからであろう。

15) 粟屋利江『イギリス支配とインド社会』（山川出版社、1998）37-40 参照。